

国木田独歩の佐伯での生活

(十四)

山内武麒

(賛助会員・佐伯市城下東町)



十五日の記には

本日始業す。独乙語研究会を始め。

「吉田松陰」を読む。此書徳富氏の贈らし処なり

昨夜高木正雄氏に一書を認む。

昨夜水谷真熊氏より災厄の急報来る、直ちに書を飛ばす。

昨日は日曜日、教会堂に出席す。午後毛利家を訪ひ

又た中根氏を訪ひ日置氏を訪ふ。

本日中桐氏並びに吉見氏に書状を認む。

と、ある。

今日十五日から授業を始め独乙語の研究会を始めたとある。これは独歩の発案で始めたのである。独乙語にも教養があつたのであろう。

この一月十五日の富永日記(学館生徒富永徳磨の日記)

を見ると、

一月十五日 午後四時となりしかば鶴谷学館に出で

ぬ。国木田師は去る十三日の夜帰り来りて本日より始業す。師は自己の郷里に七日熊本に五日此の十三日を

は旅行羈寓の中に費したれば、其間に於ける経歴は後日吾等に益する所あるべしといへり。五時昼の授業を

終りて家に帰り夕飯の後再び出校して漢学を受けぬ。

我等十余名が誂へたるジャーマンカウスは先日来れり本日は即ち創読の日なりけり。幸ひ我等には午後七時

半より八時半に至る空時あり。之を以て研究に充つる

に決まりぬ。二階の間に教場を作らへ我等こゝにて研究を始めぬ。あゝ日耳曼語如何なる人にも如何なる所

にても研究せられざるなきは日耳曼語なり。今日の挙其之を發起せしは国師なり。最も熱心に賛成せしは山

口・飯沼なり。我等は只だ「人がなせば」的に賛成し遂に茲にまで進み来りぬ。己に始めたり。さらば終りまで貫かざる可からず。傍目もふらず勉めざる可からず。今夜集まりし七名（山口・尾間・薬師寺徹・飯沼石丸・武石及我）の内真に目耳曼語の必要を感じて起らしむものあるか恐らく流行を追てなるべし。我の如きは益あらん位の思想を有するなり。惟ふに此内にては只だ一時他人のを傲ふの人もあるべし。さる人は得る所風の如けん。先づ文字を見知らざるべからず。一目すれば二十六字皆相異なるなきが如く、我が始めて英書を見し時の如き心地なり。発音はさまざま困難は感ぜざるも何しろ一つの難科なるは覚悟せざるべからず、覚悟して工夫に徹するの決心なかるべからず。八時半より代敷あり。九時半より英語ありて本夜は羅馬の史中エロイニカス等の小談を講じぬ。面白き内愛国の義氣吾人の感奮する所なりき。

と、ある。
次に「吉田松陰」を読んだ。徳富氏の贈られたものである。と、ある。独歩は前書いたように少年時代から吉田松陰を心から崇拜していた。父の勤務上少年時代を山

口県で送ったから山口県は独歩にとって事実上の故郷である。この山口県の風習や思想は少年時代の独歩に大きな影響を与えたのである。吉田松陰崇拜はそこから来ている。

塩田良平氏が書いた「欺かざるの記」の解説の中に次のように書いてある。（国木田独歩全集六巻の巻末に所載）

独歩の松陰熱は、二十四年日記にはっきり現はれてゐるが、その萌芽は幼少年時代に発している。長州は元來文学を育てる条件に恵まれながら、その政治史から見ても藩風は治国経世尚武の氣風が主であつて、純然たる文学者を生ぜしめる環境ではなかつた。その代り、明治維新回天の業の一半は長州藩の負ふところとなつた。そしてその機運を醸成せしめたものが、吉田松陰を初め所謂志士と称する人々の活躍である。従つて独歩自身も少年時代は一方では功名心の強い政治的空想を持った子供であつた。郷党の先輩の持つ功名から刺戟されたことは明らかで、この独歩の政治的空想は、独歩が上京して、彼等と歴史的名声を競うなどは要するに無意味であると自覚するまでつまり二十五年

頃までうつ勃として続いてきたものと認める。

と、ある。

徳富蘇峰は独歩が大の松陰崇拜者であることを知っていたので、この本を贈ったのである。

昨日の午後、毛利家と中根・日置の両氏を訪問したとあるが、新年の挨拶を兼ねて帰任の報告をしたのである。

次に

嗚呼己れの繋がる処を思へば、慄然として慄き、一種言ふ可からざる不穩の氣抑へんと欲して抑ゆ可からざる者あり。

と、自分のまわりで自分を拘束するものを考えている。

それは

第一、永久に存在するこの大自然の幽遠のはかり知れない懐の中にあること。

第二、人類の一人としてこの人間社会にあること。

第三、生と死との法則の中にあること。

第四、過去の歴史を視、未来の進歩を見る一点に立つこと。

第五、山間に牛をひいて一生を送り、また街頭で琵琶

を弾いて年老いる、このような人間の一人であること。

第六、孔子・釈迦・クリスト・ソクラテス・プレトール・ウオーズウオースなどの人々と同類であること。

第七、国家とか議会という題目の中で生死する人々と等しい一人であること。

第八、日本国民の最も盛んな時期に生れ、世界人類の大転換期に生れたこと。

と、数え上げている。

十七日の記

今夜「吉田松陰」を読み了った。

そして読後感を記してある。

松陰今在らず時代は転回せり。而して吾今茲に存して茲に在り。同じく歴史中の人として茲に在り、在らざる時は忍ち来らん。嗚呼、何者か来りて吾をして憤起せしむ。

人類！ 大なる言葉かな。

歴史！ 意味ある言葉かな。

人生！ 意味幽玄にして而かも適実。

と、感想を記してある。

十八日の記

今の時代、即ち自分が生れて存在しているこの時代は一種の時代であることは相違ない。自分は自分の衣服の風も自由に新しく工夫して着たいと思う心が起る。と、新時代を考えている。

個人は人類であり、人類は個人である。一であって二二であって一である。

歴史は自分に人類の主観を教え、宗教は個人的主観を教える。歴史でまた個人の意味を知り、宗教でまた人類の意味を知る。

自分は

大に為さんと欲する念、大いに尽さんと欲する念、うつ勃として禁ず可からざるを覚ゆ。

しかし、たゞ徒らに高ぶっても結局何の答もない。効果もない。

静かに何を為すか、どうして為すべきかと考え、堂々とした意気と、熱しても燃え切れない精神と気魄と、小さいことは切り捨てる果敢とを大いに修養せねばならない。これが自分の義務である。

何を為すべきかは明白である。文士として為すべきこ

とを為すのみである。自分の志向は既に決まっているぢやないか。

どんなに為したらよいか、これには毎日大いに工夫を要する。工夫を要するがその最大眼目は、忍耐持久で為すべしと云うことである。

と、文士として活躍したいと念願している。

自分が現在大いに研究したいと思っているのは、歴史科学・哲学、そして和漢文章などである。

哲学は先ず哲学史から学ぶのがよい。

科学は、植物・物理・天文・人類学である。

歴史は教会史・革命史・文明史・文学史である。

その他読み度いものは極めて多い。多いが人生観と世界観を忘れてはならない。

詩歌を大いに読みたい。人情の幽音を聞いて純情・高深・幽深、偉大の感情を養いたい。

ウォーズワースの詩はどれくらい自分の感情を高くしたか知れない。

と、自分の勉学について記してある。

学問に於ける目下の警句は、と書いて、

人間の哲理……解釈

人類の歴史……事実

人情の詩歌……解釈

自然の科学……事実

個人の伝記……事実

と、勉強の方法を挙げてある。

次に

「潔白記」に全力の幾分を分たしめよ、否な全力を注がしめよ。

と、ある。「潔白記」という小説を書いているのである。しかしこの作品は遺稿の中にも見当たらない。遺稿の中には「潔の半生」という作と、「(無題) 潔の半生」という作がある。潔白記はこれらの前作であろう。潔とは前記したように独歩自身の仮称らしい。

「潔の半生」という小説は

潔は当時二十三歳の壮年男子なり。父は官吏となりて東京に留まり、潔は四歳の時母と共に佐伯を出て父の膝下に往き、遂に今日まで全く都に育てられしなりと、書き出し、潔が十八歳の時、不幸にも父を失ひ、翌年続いて母も逝ってしまつて孤児となる。しかしこの潔には祖母が生存していた。その祖母は故里佐伯に居た。

東京に出るのを嫌つて城山の麓にある旧宅を守つて一人の女を使つて余生を楽しんでいた。

潔は三四年間滞在する積りで佐伯の祖母のもとに帰る。そして三年間佐伯で暮す。

その三年間に見聞した佐伯の風光や人物を書いたのがこの潔の半生である。

潔は心ゆくまゝ佐伯の山野のあちこちを探策して廻りこよなく愛した風光の美を織り交せて、接した人々に対し心暖く同情をいだく美しい文章で描いてある。その内容は「款かざるの記」から取材してある。

「(無題) 潔の半生」はこの「潔の半生」の草稿書きと思われる。内容は殆んど同じである。

二十二日の記には

昨夜テーン「文学史」を読む。

今朝、独乙語を学ぶ事例の如し。

午後「竹取物語」並びに「伊勢物語」を読む。

薄暮富永氏来る。

と、あり、今日はまた「王陽明詩鈔」を読んでその中から次の句を得たことを書き抜いてある。

府仰宇宙 千載相望（泰山高）

却懷劉項当年事 不及山中看圍棋（題四老圍棋図）

長風吹海色 飄飄送天衣（登泰山）

朝登泰山望 洪濤隔縹緲 陽輝出海雲

來作天門眺 遙見碧霞君 翩翻起員嶠

遙聽紫鸞 雙吹入晴美 挙首望不及

下拜風浩々

と、この記を読んで独歩の勉強ぶりを推察出来る。よく勉強し本を読んでいる。独歩は生徒が訪ねてくると、書棚から本を取り出して自分は今日こゝからこゝまで読んだと示していたという。生徒を励ます積りであつたらうが、読書好きの一面を誇りとし、楽しみとしていたのであろう。

この記の最後に富永徳磨が来たとあるが、どんな用事で来たのであろうか。富永日記を見ると、

二十二日、副番として午前九時より午後七時まで局舎に暮しぬ。我は辞職の意を決して之を国木田師に告げて我将来を頼まんだため一師は會て我を民友社に世話し見んと言はれたれば、敢て師の寓を訪ふて師に逢ひ懇談一時許りにして鶴谷学館に出でぬ。

と、ある。富永は当時電信局に見習として勤務していたが、辞めて独歩に頼んで民友社に入れて貰いたいと考えて、独歩の寓を訪ねたのであるが、この晩はとうとうこの話を話し出すことが出来なかつたのである。

この時分富永の家では亡父の残した借財の返済に追われて困っていた。十八日の富永日記を見ると、この日海崎村のおさんという女が来た。この女は東中浦村長をしていた河野某の妻で、この女の主人が富永の父に貸附けた三十円の金の催促に來たのである。河野は父の骨折で村長になつたもので、この男は父の恩は忘れられないと言っていたのに、この男が死ぬと、その妻は色々悪たれ口とおどし文句を並べて迫ってきた。父の負債はこの外にもあり貧の底に沈んでいた。富永は気がもめて夕飯の時とうとう家族の前で語つた。

「自分は今電信局の予備員として勤めているが、たとえばこれから何年しても五六円の俸給から上らないであろう。その上勉強も出来ず体は疲れてしまう。これでは我家はいよいよ行きつまってしまふだけである。今一時は苦しいであろうが一番奮発してみたい。残りの金で食いつないでくれるなら、自分は国木田先生とも誓つた約束もあ

るので、将来は必ず花を咲かせる時が来るであろう」

と、語ると、母も妹も賛成して呉れた。

と、ある。富永はこうして二十二日の夕刻、独歩を訪ねたが、この晩は話し出すことが出来なかつたのである。

二十三日の記

一昨日の午後、鶴谷校の生徒と教会の諸君と十名許りと一しよに坂の浦の近傍を散歩した。昨夜富永が来る。彼は心の中に何か心配ごとがあるらしいので慰めた。

曰く、神は決して吾等を捨てじ、吾等只だ神の愛に拠る可きのみ、又何かあらんと、話した。彼は目下生活の事情について感づいているらしい。

二十二日の富永の記の中に

師は我に云はれて曰く、君が現時は一生中の最要機なり。此時間を以てかの如き職業に全く献し心身共に磨れぬるは実に遺憾の至りなり。然り、宜しく退くべし。君にして若し失望せず智徳佳なれば神は決して棄て玉はし。

と、ある。独歩は富永に電信局を辞めよと勧めている。

次に

吾が文学上の目的は如何か、更らに言ひ換ゆれば吾が享け得たる生を以て人間の上に尽すべき義務は何ぞと、問い、それは

自分の魂がこの世界で観たところ、感じたところ、考えたところを正直に告白することである。と答えてある。

二十四日の記

今夜の寝る時又た来りぬ。窓外雨滴静かに室内思ひ幽なり。

と、あり、その幽なる思ひを書いてある。

あゝこの不可思議な天地の間に存在するこの人間の命自分もまたその一つを享けている。自分も人で人の受けるべき運命を享けねばならぬものである。あゝこの一つ生命の運命、考えると心も迷ってしまう。昔の人は今はない。自分も何時から消え失せてしまう。毎日することは何の意味があるか、心は迷い天地の真意を知ることが出来ない。迷うのは人の常であり、知らぬは心の常か。

一人の子供の頃からこのことを思い初めて老年までのことを想いやり、終にはこの世から消え去ることを考え

ると、人生はおそいようで早く、早いようでそこに何か意味がありそうである。あゝこれが思いの種である。

と、人の一生のことを悲しい思いで考えている。

次に

今夜雨を衝いて登校、路、陋巷の暗き処を過ぐ、思ふて人生の生存、天地の玄妙の事に至り、卒然として回顧すれば、雨暗く魂泣く。

と、雨を衝いて登校したその道の考えごとを記してある。

二十五日の記

梅花の香は吾をして心思恍惚ならしめ、春神花霊の天国を恋せしむ。

恋愛は春神花霊の妙香ならずや

と、馥郁たる梅の香を称え、春と恋愛とを聯想している。

次に

人間には事業・進歩・労働・忍耐・節操・義務・公共国家などと云うような冷たい世界のみではなくて、春風梅花・桜花・恋愛・清泉・桃園・明日・唱歌など云う長閑な世界も又備わっていることを忘れてはならない。

冬のみが、秋のみが人間の世界ではなく、五月の日中

七月の夕暮も又男女・老人・幼児の世界である。

と、世の中は冷たいものばかりではなく、暖かいものもある。と説いている。

次に詩人の本分について記してある。

詩人の本色は、注入に非ずして開發にありと思ふ。

と、書き、何故なら、詩人の微妙で幽深な詩句は、われわれ人間の心の底の底の琴線に触れた時にその力は終る。そしてそれが触れて霊音を発するのは、発する線が自然に備わっているからである。人間最高の生命は実にこの調べ高い妙な音の中に呼吸するところにある。詩人は先ず自分自身でこれを呼吸してその妙機を感得し、これを詩句にして、他人の琴線に触れさせることである。

と、詩人の偉大な本分について書いてある。

次に

自分は自分の眼で自身でよく見て、自分の情と智とで自分で判断せねばならない。思うにまだ定まった事実はない。まだ完全に感じとられた光景はない。月を詠じたものは東西幾千幾万とある。しかし月は依然としてその美しい光を放ち、われわれに感得・感受を訴えている。

このように社会上や実生活上、歴史上のあらゆる事実

で自分の眼前にあらわれたものは凡て、自分は最初の人としてこれをよく読まなければならぬ。

と、これは、

今夜、乞食の地上に眠れるを觀たり、而して此説を得。

と、記してある。

二十六日の記には

白雲の漠々たるを睨視して吾が心躍り、寒風樹梢に鳴動して吾が心躍る、これ吾が宇宙に俯仰し千載に願望するの情を刺戟すればなり。

と、ある。自然の動きに心が躍る。この世に千年生きる願望を刺戟するからであると、自然を讚美している。

次に

人生の事實は吾をして人生の意味の深さ広さ長さを直覺せしむる也

と、だから自分はこの事實をよく観たい。聞きたい。歴史上の事實や、眼の前の事實は、自分に人生の意味になつて真剣な氣持を起させる。

と、色々な事實をよく觀察しよく見聞したいと考えて

いる。

二十七日の記

昨夜「ゲエテ」（十二文豪の一つ）を読む。

昨夜学校からの帰途空を仰いで大声で呼んだ。この身が天地の間にあることを痛感したからである。そして次にその痛感したこと。

溜々たる人生の流れ、地に流れそめてより果して幾年ぞ、国を以て言へば古今東西盛衰興亡の跡、挙げて数ふ可からず。

と、考え、エジプトの盛時は今どこにある。印度の文明今どこにある。アゼンスの盛観は何処にある。大羅馬はどこにある。それを個人について云えば、生れて忽ち死ぬ、泡のような運命である。全地球を馳せめぐって見れば墳墓が累々と群立しているであろう。笑い泣き、争い抱いて生滅してしまいつゝある。アレキサンドルもなくハンニバルもない。ウォーズウォースは何処にあるか、ゲエテはどこにあるか。不死を歌った者は何処にあるか。無窮を歌った者は何処にあるか。依然としているものは依然としてある不可思議な無窮不尽の宇宙のみであ

る。そして今はこの中に立っている。生とはどんな意味があるのか。歴史とはどんな意味があるのか。人間の労働とはどんな意味があるのか。一生の大安心は結局何の上に立てば得られるのか。

と、生命の果敢なさを嘆いている。

次に

人間は常に如何なる点に其生命の重荷を感じず、人間は自然に備はれる其の生命の意義をば如何なる風如何なる場合に発露せしむるぞ。人間は如何なる経過如何なる境遇に由りて其のシンセリティーを失ふ。

との三つの問を出して、

詩人の多くは知らず知らずのうちにこの最初の問題の答案を作り、第二の問こそ詩人・美術家或は哲学者・教育家が常に注意する所でそして直覚するところである。

第三は未だ果してどんな人によって説明されたかを知らない。この問こそ最も考えねばならないものである。

と、説明してある。

二十九日の記

昨日の午前は教会堂に出席した。大分に滞在している

宣教師ウ井ルソン氏が出ていた。礼拝がすんで氏の宿に訪うて話した。氏はアメリカノースカロライナの人である由を語った。彼は聖教の宣教師でありながら少しも熱心さが見えない。このような人に伝道を一任してあるので、クリスト教の伝播が遅々として進まないのである。

午後散歩に出てたまたま尋常小学校の校内に入って見物した。この建物は旧藩主の御殿であったものである。

今は変じて小学校となっている。その厳めしい楼門は今は明治の世の子供達が朝夕出入しているところである。

嘗ては封建の武士達が威儀を正して坐し集会していたであろう大広間は、今は十九世紀の学術の初歩を教える教場と変り、嘗ては殿様の御居間であった処は、今は丁度よい教員室と化っている。

鶴谷学館の生徒であつてこの小学校の教員をしている飯沼と長田の二人が教員室で事務を執っていた。われわれ兄弟の足音を聞きつけて、招き入れて暫く話した。それから飯沼と弟と三人で散歩に出掛けた。川岸を伝うて船頭河岸の近傍まで来たところで、また例の紀州乞食を見る。

彼、塵芥捨場の傍に蹲踞し、竹片にて頻りに芥の中

をさぐり、大根の片など拾い出して口にはこび居たり
吾等三人彼の傍に近づき呼掛けぬ、彼は物うげに返事
す。「寒いか」答へて曰く「ウム」「甘いか」「ウォ
ー」

と、紀州の塵芥捨場を探す様子を描写して、それから色
色と問い掛けてみると、意外にも正直で智恵もあるのが
わかった。彼はたゞ食うために生きている。いや死なな
いので生きているのである。生きるために食うのである。
食うものがないので芥の中をさぐるのである。彼は獣よ
りたゞ一步上で、しかも正直でまるで子供のものである。
自分はこのことをよく考えねばならないと感じた。彼に
饅頭を五つ与えた。彼はたゞ貰って食べる。別にお礼も
言わないが全くよろこばないでもない。記憶は無いが、
いや、ある。邪推するか、いやしない。来いと言えば来
るし、去れと言えば去る。と、見た様子に感じたことを
書いて、

嗚呼等しき人間、天の下、地の上の事実、如何に解
釈すべきぞ、生命其れ自身驚くべく畏る可しとすれば
この地上に捨てられたるこの生命の命運は更に意味あ
る驚懼の事実にあらずや

と、乞食紀州に心から同情を寄せている。

昨日カーライルの「ゲートル論」の巻末にあるゲートル
死の一篇を読んだ。そして死について感想を述べてある。
「ゲートルの死」は意味ある事実である。カーライルは
死んだ。これにも意味がある。自分も死ぬであろう。あ
あ死、これはこの無窮無辺の自然のふところの中で行わ
れつゝある不思議な法則である。吾々はこの法則の前に
立つ時は、実に生命そのものを感じないではいられない
と。

次に

嗚呼自然。美なる、無極なる、不則なる自然よ。

嗚呼人類。此の地上に連続しつゝ生滅する人類よ。

嗚呼人間。「時」の大王国に支配せられて呼吸する。
人間よ。

と、自然・人間と挙げて比べている。

次に

ホーマーがヘクトルの口をかりてトロイの滅亡を予言
して人の世の常ならぬを歌い、小シピラ、カーセージを
焚いて、その滅亡を感じつゝ、またローマの運命を予想
してこの詩を吟じ、そして今ローマが亡んで以来幾百年

経っている。誰が知るであろう。この人類自身が全く滅

亡し尽くす日は必ずしも遠くないことを。

これはホーマーの詩の読後の感であろう。

また、カーライルは云った。

歐洲の文学も滅びん、歐洲自身も滅びん。地球自身

の逝かん。擾々たる此人類を載せた池の一小舟、而し

て其紛々雑然たる歴史何日か消え去る日のある可し。

然り片雲の大空より消え去る如くに消え去りなん。然

る時に、人、何者ぞ、嗚呼然る時、人、何者ぞ。と。

と、カーライルは世の無常を詠いあげている。

それに対し、独歩は

されど、されど、時の裏面は永久の命に非ずや。永

久の命に非ずや
と、永遠の生命を確信している。



切絵はがき発行のお知らせ

みなさんも市報「さいき」の表紙でご覧のことと思いますが今度、佐伯史談会の事務局長をつとめて下さる佐藤巧さんの切絵が絵はがきになり、「みどりの会」から発行されました。

図柄は、城山、櫓門、養賢寺、坂本邸、大日寺、船頭町の六種です。一部350円です。

佐伯を訪れた記念、佐伯の紹介などにおすすめします。
(後藤 知久 記)



城 山